
バレンタイン現象

オオハタ ユウキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレンタイン現象

【Nコード】

N5038K

【作者名】

オオハタ ユウキ

【あらすじ】

明日はバレンタインデー。でも僕たちにそんな事は関係無かった。どうせチヨコなんて貰えねえよ。……なんか腹立つ。

雪がちらつく寒空の中、人が見ている前で、地面に落ちている犬の糞を集めた経験はあるだろうか？ 僕にはある。あの頃は本当に若かった。わけのわからないエネルギーに満ち溢れていた。

あれは中学三年の冬だっただろうか。もう既に全員が進路を決めており、悩む種も無くなった僕たちは暇をもてあますように遊び耽っていた。それは別にその時期だけでなく、年中行事のようなものだったのだが。お陰で僕は勉強をしなくなり、県内で有名な馬鹿ばかりが集まる高校へ行く事になったのだが、その内の二人は誰でも名前ぐらいは聞いた事のあるような偉い大学へ行ったので、毎日遊んでいた事と勉強は無関係だったのかもしれない。

二月に入ると寒さはより一層強さを増した。その日も一日の授業が終わると、僕たちは誰が呼びかけるでもなく教室に集まり、無駄話しに花を咲かせた。黒板に落書きをしたり、持ってきていた工口本を見せ合ったり。三十分ほどして話しも落ち着いてきたという事もあって、家で集まってゲームをすることになった。

何も入っていない薄っぺらな靴を持って廊下を歩いていると、一人がこんな事を言いだした。

「そっういや明日ってバレンタインデーだよな」

母親や兄弟以外に貰う当ても無い僕たちは、その話題を避けるようにして別の話題で盛り上がるうとしたが、また「今年のバレンタインデーは平日だっけ」なんていう事を言いだしたので、仕方なくその話題に乗る事にした。

「バレンタインバレンタインって言っても、僕たちには関係ないだろ」

「えっ？ 俺毎年貰ってるよ。母親にだけど！」

「母親とか無いわ……。まあどうせクラスの不細工が全員にあげる
」とかなんとか言つて、安いチョコ配るだろ」

「それもねえよ！ だれが喜ぶんだあんなイベント」

わはははは、と馬鹿笑いをしながら靴に履き替え、学校の門へと
歩こうとすると、バレンタインの話題を出した一人が靴箱をじつと
眺めているのに気づいた。

「何やってんの？ まだ時期じゃないし、何か入ってるわけもない
じゃん」

「いやあ、俺良い事思いついたかも」

気づくと僕たちは、友人の家で割り箸とナイロン袋をそれぞれ手
にし、道端を凝視しながら通学路を逆走していた。帰宅中の学生に
よる、僕たちがまるで変人だと言わんばかりの冷たい視線を浴びな
がら、犬の糞を集めていた。

「六組にさ、すっごいナルシストな奴いるじゃん？」

「ああ、あいつな。まあ顔は微妙だけど」

「むかつかねえ？」

「まあ、そりゃあむかつくわな」

「チョコレート送ってやるうぜ」

「え？」

しかし二月にお目当ての柔らかい犬の糞が見つかるわけでもなく、
僕たちのナイロン袋には、かさかさ乾いた犬の糞が少しと、あと
は残飯や煙草の吸殻が入っているだけだった。好奇の目で見られる
という代償を払ったにしては、得た物は何も無かった。こんな事し
てるからチョコレートすら貰えないんじゃない？ という言葉が僕
の頭の中を過ぎたが、他の五人の頭の中にも同じ言葉が過ぎって
いたのかもしれない。

「こんなの集めてどうするんだよ」

「チョコに溶かしてナルシストな奴の下駄箱に入れる」

途中スーパーでバレンタイン用の包装紙を購入し、集めた戦利品と包装紙を友人の家へ持ち寄った。さすがに本物のチョコレートと区別がつかなくなってしまう、それを食べて病気にでもなってしまうかもしれないという危険性があつたので、チョコレートを溶かすという案は却下された。六人の中で一番字が女の子っぽい友人にメッセージカードを書いてもらう。

「一目見た時からあなたのことが好きでした、とかでいいか？」

「オツケーオツケー！」

その時の僕たちには、罪悪感なんていうものは全く感じていなかった。割り箸とナイロン袋というアイテムを装備した瞬間、悪を倒す英雄にでもなった気でいた。

犬の糞の上に紙で「実はうんこでしたー！ ばーか！」という紙を置いてから、銀紙でハートの形に整え、メッセージカードをその上に置いてから、可愛い包装紙で包んでからシールのリボンをつける。

集めてから完成するまで、一時間と経っていない事に気づき、どうせなら今から下駄箱に入れに行こう、と友人の一人が言ったので十五分ほど掛けて学校へ行き、ナルシストの下駄箱へチョコレートを――実はうんこ――を入れる。楽しくて仕方が無かった。今までバレンタインデーなんて「期待させるだけさせて結局何も起こらない日」でしかなかった。クラスにいたイケメンの鞆の中に溜まっていたチョコレートを指を咥えて見る日でしかなかった。それが今や！僕たちはそんな日を楽しんでいる！ 生きている事を実感している！ 生きているって素晴らしい！

ナルシストがそのチョコレートを開けた時の反応を見る事はできなかった。もしかしたら家に帰って泣いていたかもしれない。次の日の放課後にはチョコレートが無くなっていたので、手に取った事

は確実なのだが……。

僕たちはそのナルシストの事が嫌いというわけではなかった。何
度か喋った事があったが、明るい良い奴だった。あの時のわけのわ
からない盛り上がりは、どんな心理だったのだろうか……。

それから五年以上が経つ。風の噂によると、そのナルシストはと
んでもないぐらいの美女と結婚したらしい。この場を借りて、おめ
でとうと言いたいです。あと謝罪しておきます。一応。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5038k/>

バレンタイン現象

2010年10月28日04時34分発行